

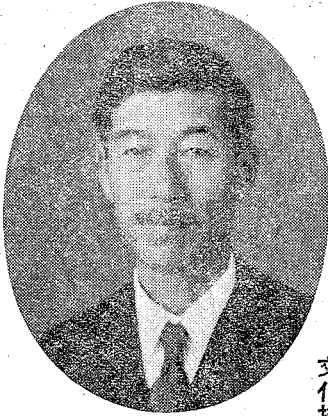
説苑



内務技監の今昔 (五)

青山士氏

清水生



文化技術と社會國家

昭和九年五月十一日に前の内務技監であつた中川吉造博士が内務技術界の空氣一新と後進に途を拓くために

勇退したが、そのあとを承けて内務技術部の最高地位たる技監の地位についたのは青山士氏であつた、氏は技監在職中に於て文化技術 Civil Engineering と社會國家の進歩發展との關係を歴史に徴して明かになし、更に社會をして文化技術が社會國家の發展に對してどれだけの役目を果たかに付いて所謂社會の進歩發展と文化技術について。

我等生をこの世に享けて文化技術を以てこの世に立ち以て人類及び國家に貢獻せんとするものは須らく己の天職

とする文化技術か社會の構成及び其の文化の進歩發展についてどの程度に重要であるか、即ち宗教、軍事、外交政治等國家社會の構成及びその文化の進歩發達に必要な他の諸部門に伍して其の重要性からして何の邊に位するか又位すべきであるかを自覺すると同時に社會及び國家として充分にこれを認識せしむる必要があると思ふのである。

と、氏は文化技術と社會國家との關係を説いて更に論旨を進めて。

人類がこの世界に出現したのはエジプトのナイル河の邊であるか、小亞細亞のチグリス・ユーフラテス河の邊であるか或は又印度のガンヂス河の邊であるか、何處にあつたにしても、この地球上に靈性を持つた人間が出現すると同時に先づ第一に宗教が現れたのである。次に人類は其の種族保存のために他の動物と戦ふことを餘儀なくせられて軍事が始まり、續いて種族と種族の對立から軍事の外に外交の必要を生じ又自然力と戦ひ又之を利用し

て人類社會の進歩發達を計らんがために文化學術が應用せらるるに至つたのである。

とて人類の繁殖は益々社會を複雑化ならしめ従つて政治の形造並に文化の發達を來たしたことを説いて、古代アツリア、カルデア、エジプトや、古代支那の時代から希臘、羅馬時代に至る文化技術の盛衰は社會國家の榮枯を物語るバロメーターであると斷じて人類發達史上の通則を架説してゐる。

有史以來の文化技術

更に進んで氏の社會進歩發展と文化技術に對する論據を見ると、氏は、文化技術の盛衰は曠て社會の盛衰、國家の興廢を豫斷し得るの材料であると斷じて。

民族對民族、國家對國家の戰爭に於ては互にその建設生産の全力を擧げて破壊消費に費すことは人類の最大なる不幸であるが、一朝平和克服の晨に於て又は震災、水害其の他の災厄の後に於て社會の再建、産業の復興の爲には先づ第一に必要とせらるゝのは文化技術である。夫れ

は將に人類が社會を組織し、國家を建設するに至つた當
初、或は又 Ptolemy が新しき地に入り込んだ時と同じ
である。

とて紀元前二千年頃よりカルデア「昔のバビロン」の地方
及び埃及のナイル河の沿岸に於ける其の民族が榮えたる時
代と文化技術が大規模に施行せられてゐる例を引いて、更
にその時代にエチオピアから地中海に至るナイル河の谷は
灌漑工事によつて豊饒の土地となつて住民も増殖し、又貿
易交通も頻繁となつたことや、またフィニシア人の航海も
繁くなつて小規模ながら多くの港灣施設等をなしたことを
述べて。

ポルトガルのバスコダガマが西歴千五百年頃にアフリカ
洲の南端を迂廻した時より遡ること約二千年、即ち西
歴紀元前六百年頃にはフィニシア人は紅海地方に港を築
造したり、アフリカ洲を一週したことは埃及古代史の探
究に依つて發見せられてゐる、其他同地方におけるピラ
ミッド、オベリスク等の建設はその時代の文化技術の著

しい進歩して居つたことを證明するものである。又埃
及人はナイル河を灌漑のために大に利用したものであ
つて、即ち古代埃及の最盛期であつたアメンメー三世
Amemhe III 王朝の時代「筆者註西歴紀元前千九百八
十七年頃」に一技術者の勧めに従つて、ナイル河岸の早
魃に備ふるためにその時分の大都市メンフキスの上流約
160km. の地點に窪地を利用して貯水池となし以てナイ
ル河の洪水を貯溜したのは非常に優れたる文化技術の具
現せられたる偉大なる土木工事である。

とて大古の文化技術を縷々として説いて、阿弗利加洲の北
部及び中央亞細亞に於ける有史以前の文化を推定するに足
る文化技術の實績を引たるあとローマ帝國時代に移つて。

羅馬帝國と鋪裝道路

羅馬帝國が榮えつゝあつた時代即ち Appian, Claudius,
Caesus, の時の西歴紀元前三百年頃よりその領土の主
要都市を聯絡せんがために數百料に及ぶ鋪裝道路、即ち
有名なる Roman Road が築造せられたが、夫れは五

百年以上も完全に維持せられたと言ふことである。其の他上下水道工事及び國防の目的に造られたる有名なる Roman Walls に現はれたる Masonry Works 及びローマ本國及び其の領土内各地の主なる都市に給水のためには西歴紀元前三百年頃から紀元二百三十年頃までに Appia, Anio vetus, Marcia, Tepula, Julia, Virgo, Alsietina, Augusta, Claudia, Anio Novus, Trianana, 及び Alexandria の有名なる Wacineduct 其の延長合計約 55 km, 夫れに附隨せる沈澱池給水設備が築造せられたのであつて、今尙その跡は當時の燦然たる文化技術を忍ばしむるに足るのである。

と古代羅馬の文化技術とその施設を擧げて、近代の文化技術に及んで。

近代歐米の文化技術

近代の歐米に於ては千九百十四年曩の歐洲大戰突發以前の興隆獨逸に於てはキール運河を始めドルトムンド、エムス運河、ハンブルク又はブレメン港を作つた土木技術

の外冶金、電氣、機械化學、其の他の文化技術の發達は隆々たるものがあつた、又北米合衆國の今世紀に於ける文化技術の發達は冶金、電氣、機械等の部門の外、土木技術に於て道路、橋梁建築、鐵道、上下水道及びパナマ運河開鑿等誠に偉大なるものがある。又革命に依つて疲れたる蘇聯が所謂復興五ヶ年計畫を實施して凡ゆる文化技術を動員してその航空網を整へ、又黒海に注ぐドニエブル河の河水を制禦して一氣に 756000 HP の發電をなす等、其の他文化技術の施行によつて蘇聯の經濟狀態は大に改善せられ、更に第二次五ヶ年計畫の實施に依つて益々國力の充實、國民の幸福増進が實現せられつゝあることを確實に豫想されるのである。

と云つてゐる更に青山氏の論説は我國の過去及び現在の文化技術に及んで。

我國の開關と土木事業

我邦の過去を顧るにその建國の精神は侵略に非ずして和平であり文化を害ふ族を討ち從へて農工の業を教へられ

たることは古代史に明である、即ち神武天皇が天業を創め給ふに際しての詔に……地を大和の糧原に卜して大いに土木を興し天富命を以て役を重さしめ云々……とあるのを見ても我國開闢の始めから土木事業が國家建設の上に離るべからざる關係にあつたことを知るのである。

と氏は爾來何れの天皇も常に土木事業を興して庶民の福利増進を圖られたる實例について例へば綏靖天皇が山陽道を開鑿させ給ふたことや、孝元天皇が東海道南海道を開鑿させ給ふたこと、崇神天皇が依網、友折池等を作らせ給ふたこと、垂仁天皇が河内大和其の他の諸國に八百餘の池溝を開いて農民の富を致させ給ふたことや、仁徳天皇が難波堀の水利を治めさせられたこと又は推古天皇が三河、遠江、甲斐其の他の諸國に百八十餘の橋を架けさせ給ふたこと等に及んで。

文武天皇が大寶元年に大寶律令を制定させ給ふたときには特に土木寮の職制を定め以て土木及び採伐のことを掌らしめ給ふたのである、之は天皇が國家文化の進展に土

木に關する事項を特に重視させ給ふた結果と拜察さる。と述べて、更に武家政治の時代に移つて。

其後政治が武人の手に移つてからも天下を治むる政策として、何れも國利民福の基礎をなす土木事業を施行することを重要政策の一つとしてゐたのである。

とて平清盛の日宋貿易のために攝津の經ヶ島の港を築いたことや、音戸の瀬戸を切り開いて水運の便に供したことや現今の神戸の地福原の都を建設した等の土木工事を擧げ又源頼朝が鎌倉に幕府を開いた時に、當時絃卷田と稱せられた沈田を埋立て和賀江に港を築きそこに幕府を建設したとや、更に織田信長が技術を奨励するために特に技術拔群の者に對して恩賞を與へる方法を探つたことに及んだことに。

信長沿道の部落に道路工事を命ず

當時交通の不便は意想外に甚しかつたので信長は領内の道路の幅員を三間と定め沿道の部落に修築を命じて工事至難の所は隣郷にも助力せしめ、又兩郷間に橋を架ける

場合には一郷は材木、他郷は人夫を提供せしむる等此等は道路法の歴史に於ても特筆大書すべき事柄であると思ふのである。斯の如く天下に覇を稱へた者は何れも土木

工事を治國平天下の重要政策として居つたのである。秀吉に至つては其の政策を一層強調して彼が、信長の一周忌を大徳寺で行つた後、大阪を新なる根據地と定めたる時に關西三十餘國の大小名に謀して大土木事業を起して

大阪城を築き、大阪市街を構築すると、同時に加藤清正等をして諸國に土木事業を起して庶民を賑はしめてゐる。とて織田豊臣兩時代を通じての土木事業を細述して徳川時代

代に及んで。徳川幕府に至つては家康が戰國亂難の後を受けよく江戸三百年の泰平の基を築くに就ては鎖國政策及び諸侯統禦の爲に參勤交代制を採ると同時に又一面諸大小名に課命して盛に土木事業を起さしめ、以て兵備を整へる餘力を殺ぐに努めたと云ふことであるが、其の結果として諸大小名に課した江戸開拓事業の施行を始め東海、東山、中

山道等の街道改修、富士、利根の河川改修、上水道の施設等が行はれ、又三代將軍家光の時代には荒川の改修、江戸川の開鑿が行はれてゐる。

とて、國勢上に一時代を劃したときには何れの時代でも文化技術の旺盛が伴ひ従つて大土木工事が起つてゐると土木工事の興隆は國勢上の一時代を劃して居ることを肯定して氏は。

若しも戰國時代から降つて徳川時代の初期に於て爲されたる Military engineering Works 即ち當時の築城兵備に使用せられたる努力と材料を以てすれば少くとも東海道及び山陽道の幹線道路は Roman Road の如く鋪装せられて利用せられて居つたであらう。

と云つてゐる。然して氏の文化技術に對する見解は、人類社會の自然力に對する戰術

斯くの如く過去に於ける文化技術史と社會國家の盛衰の跡を觀る時は軍備は一つの社會國家の他の社會國家に對する時の鑑であつて外冠及び内亂に備へ、外交工作は之

に依つて民族對民族、國家對國家の交を敦くし其の争を平和裏に解決して、その共存共榮を計るにある、而して文化技術の一部門なる土木技術は人類社會の自然力に對する戰術であつて、自然力に抗する鎧を供するのみならず、文化技術の部門と共に社會國家の文化經濟の發展充實の基礎を作るものである。

と論じて。

政治の奥儀は政治なしに治まつて行く様にするることであり、道徳を徹底せしむることは、道徳律なしに道を行ふにある、又軍備を確にするは平和を來らさんが爲である。此等は大なる逆説の如くであるが眞理である、然れども幾くも政治なしで軍備なしで又道徳律に拘束せらるゝことなき平和泰平の理想國でも人間が生存し自然力が荒れ狂ふ世界には文化技術は一日も缺くべからざるものである、茲に始めて土木技術が社會文化の發展の役割の何の邊に在るかが了解せらるゝのであつて、社會はその進歩發展に對する土木技術の重要性を正面に、而して明

確に認識せなければならぬ。

と結論して土木技術が社會國家の存在と其の發展に對して如何なる位置にあるかを自覺せしむると同時に一般社會をして明確にこれを認識せしめんとしてゐる、こゝに斷つて置くがこの青山氏の所論は昭和十一年の二月であるから其後内外諸事情は著しい變化を來たしてゐるも併乍らこの論據の主旨たる「社會の進歩發展と文化技術」の所論に對しては何人と雖も肯定するところであらう。

青山氏の略歴

緒て筆者はこの青山氏の所論の一端を見ても氏は單に凡庸の技術家ではなく政治、哲學、經濟等各般に廣範なる智識を有して而もその技術方面に至つては學理と實際とを兼ねたる優秀なる技術家であると思はれる節は氏は彼の世界的大工事の一つとして數へられるパナマ運河の開鑿に關して多年その現場に於て鍛鍊されたのを見ても推知することが出來得ると思はれるのである、更れば氏は如何なる經歷の持主であるかを窺ふて見ると。

青山士氏は明治十一年九月に靜岡縣の青山徹氏の三男として生れてゐる、明治三十六年に東京帝國大學土木學科を卒業すると我が技術界の大先輩である廣井勇氏の紹介で渡米して米國ニューヨーク、セントラル・エント・ポトリン、リババア會社同政府イスマアン・カナル・コムミツヨンに勤務してパナマ運河の大工事に携ること七年有餘の永きであつた、大正四年歸朝するところ、始めて日本の官界に足を踏み入れて内務技師となつて東京土木出張所勤務となり、更に躍進して新潟土木出張所長を就任してゐたが昭和九年五月十一日に當時内務技監であつた中川吉造博士の勇退と同時に内務技監となつて内務技術部の最高位置を占むるに至つたのである。氏は技監在任は約二十年半を以て昭和十一年十一月七日にその職を辰馬鎌藏氏に譲つて茲に官界を去つたのである、其後三菱

工業の顧問となつて居るが、氏の家庭は宗教は累代禪宗にして明治三十年生れの賢妻むつ女の外に長女まさ女と二女のぞみ女と明治八年生れの氏の令姉せん女が居られ

るやうである、位階勳等は從三位勳二等を賜つてゐる。これが氏の略歴とも云ふべきものであるか、かやうに青山氏は官界に入る學校出の普通の人々と異つた行方をしてゐるのを見ても平々凡々の人々とはその頭の持方は異つてゐる亦その着眼點も常に大局を達觀してこれを技術と文化の發達とに結び付けて技術界に貢獻して居るやうである。

青山氏の自邸を訪ふ

そこで某日筆者は氏を澁橋區下落合の邸を訪ふてみた、刺を通じて來意を述べると早速奥の客室に通ふされたのである、この人が前技監であつたかと思はれる位實に平民的で加ふに頭は低く丁寧至極なるには筆者は初対面ではあるが心からなる尊敬の念と恐縮の心が湧き出たのであつた、兎も角筆者は初対面の挨拶をしてから種々談話を取交はしたが青山氏は。

過日平井君に遇つたら會で書いてゐる「内務技監と今昔」と題する記事に付いて今度はあなたの番になるから清水と云ふ人が行くから會つて話してくれとのことであつた

が、僕はその際に僕のことを書くのは棺桶に入つてから
でよいだらうと云つて置いたやうな次第で、夫れは人の
傳記や批判又は功罪と云つたやうなものを書くのは生前
の人では却々書きにくいものであるからそう云つたので
あつた。

と、氏は一口に云へば人物評の如きは生前の人ではその書
方に困難なること又正酷を穿つて書くことの六ヶ敷ことを
云つたであらう、即ち人間は棺を負ふて定まるとの意味で
なからうか餘談は偕て置いて。氏は更に言葉を次いで。

併乍ら僕の話でも道路改良會の雜誌に二三頁の材料にな
るならばと思ふて二三所感をお話しするが。
と前置されて。

僕が學校を出たのは明治三十六年で既に日露戦争の噂さ
があつて世の中は不景氣であつた時であるが、故廣井勇
教授が頻りに海外行と奨めてくれてパナマ行を紹介して
くれたのと僕は多少これ等に關する書物等を讀んで趣味
を持つてゐたので行くことに決定して明治三十六年七月

十一日に當時四千五百噸程の汽船に乗つて翌月の十一日
に彼地に着いた次第である、そうして約七年有餘所謂消
煙蠻雨の熱帯の不健地で働いたのであつたが、明治四十
五年一月廿七日に歸つて來たときは弟が唯た一人で迎へ
てくれただけであつた、次いで同四十五年三月一日に内
務省に入つて始めて役人となつた許りで夫れが昭和十一
年十一月まで居つたのである。

十一と言ふ字は思出が深い

こゝで青山氏は十一といふことは僕にとつて非常に意味
深いことであるとて。

僕は明治十一年生れで、學校を卒業したのはやはり明治
三十六年七月の十一日、パナマに行くために船に乗つた
のはまた同年七月の十一日、彼の地に着いたのも翌月の
十一日そうして歸朝したのは千九百十一年の十一月十一
日、その船室が十一番、等々で實に僕にとつては十一と
云ふことは奇々しい何等かの因縁を持つてゐる、又僕の
名は明治十一年に生れたので父が十一と名付けるのも何

等か變であつたのであらう、士ブキウと付けたがこれは凡て明きらか即博士の意味だそうだが、文字では十一のやうに見えるのであらう。

と氏は笑つて語られたあとで。

僕の技監當時即ち昭和九年頃から十一年にかけては各地に頗る水害の多い年であつた、その御蔭でとも云ふか河川治水の豫算は通ふて相當にあつたので技監當時は漸くその責をふさいだやうな有様であるが、各省の水に關係ある技術官の間で水害豫防対策を協議したこともあつたが、水害につれて例の利根の増補工事の計畫を立て、専門委員を設けて着々進捗せしめたのであつた、この豫算は辰馬君の時に通うたが、大體現在に於てもこの計畫の線に副ふてやつてゐる。

とて氏はこゝで水害と利根の増補工事計畫について縷々述べられたあとで、

やはり僕の技監當時であつたが、幕府、明治とを通じて問題であつた銅山川の問題：水利問題と東京市の大河内

水源問題を行政的に解決したが、これには技術方面からもせめて行つて漸く行政的解決を見たやうな譯である。と語られたあと次いで氏は技監當時に前のシヤム國即ち現在の泰國に道路技師を送つた話やベンコク港灣の懸賞築港案等について縷々話されたが最後に氏が學校を出て間もなく七年有餘の永年に亙つて熱帯の不健地であつた巴奈馬で働いたことに話は及んで。

巴奈馬運河について

僕が學校に居る時にスエズ運河は有名なる佛蘭西の技師レセツブ氏に依つて開鑿せられたことを聞いて巴奈馬も亦同技師によつてその工事を始められたがこれは遂に失敗に終つたことも聞いてゐた、ところが明治三十六年學校を出る少し前に東京經濟雜誌に峰岸氏の視察報告が出て居つたので夫れを讀み、また其他の書物及び廣井教授の話等によつてその運河開鑿工事に趣味を持つやうになつて終に機會があれば彼地に渡つて其の仕事の一部に従事したいとの希望を持つやうになつたのである。

と氏はパナマ運河工事に對する趣味と希望とを述べて。

そうして前述したやうに同年の七月十一日に四、五人の友人に「我汝に命ぜしに非ずや、心を強くし且勇め汝の凡て往く處において汝の神エホバ偕に在せば懼るゝ勿れ戰慄なかれ」とヨシニア記第一章第九節の言葉を以て送られて旅順丸といふ約四千噸位の船に三等旅客となつて横濱港を出帆して、先づ加奈陀に渡つて直ちに米國に入つたのであつた、そうしてワシントン州のシャトル市附近に於て種々の勞働に従事してその時の至るのを待つて居たが、丁度千九百四年の二月にパナマ共和國と米國とが運河條約の批准を交換したので同運河工事は遂行せらるゝとの見當を付けたのであつた。

と青山氏は話されて、次いで當時シャトル市に居つた後の代議士服部綾雄氏や氏の小學校時代の先生にて森三郎氏等の世話になつたことに話は及んで、

この人々の援助によつて米國西部を出發して大陸を横切つて紐育市に着き當時コロンビヤ大學のウキリアムエツ

チバラ教授へ廣井教授からの紹介状を持つて運河工事に就職方を依頼したが、未だ出發する組が定まつてゐないから今少し待てといふことであつた。

とて氏はこゝで異郷の空で金もないので遊んで居ることも無駄と思ふてその間に紐育市給水のために新クロトン堰堤の築造に當つてニューヨーク、セントラル・エンド・ホドリ、リバー・鐵道會社の線路變更工事に働くことになつたと等々語られたが、最初は言葉も出來ず困つて二週間計りは下宿に歸へるとその練習に費したことや、辨當持、杭持から一寸した試験を経て水準儀及び經緯儀を持たせらるゝことになつたことや一心に線路中にトランシットを据へて曲線を打換へて居る時に急行列車が後方から驀進して來て將に轢かれんとするとところを危く助かつたこと等を色々話されたが。

スミアンカナルコムツシヨンの職員となる

その内に前に依頼して置いたバア教授の盡力によつてスミアンカナルコムツシヨンの職員の一となつて同年

六月一日に紐育港をユカタン號で出發してその船の中で契約書に自署して工事従業員となつて同月の七日に熱帯夕陽の照らすコロンの港にいたのであつた。

とて氏はこゝでこの地方のことを述べて此邊のカリビアン海は或る西洋の小説家の書いた燈臺守と云ふ小説の Location に似て居ることや、この港は當時頗る不潔で又善い宿もないから到着した晩は船で泊まつて翌日各人と共に蚊帳と毛布一枚を渡されて、こゝから七哩餘離れたポイオと云ふシヤグレス河の岸にある村落におちついたことを面白く語られたあとに言葉を次いで。

夫れから二三日して測量、ボーリング等の機械が到着したので測量及び地質調査の準備にかゝつて初めにポイオの堰堤豫定位置の測量と地質調査に従事したのであつた、夫れから堰堤豫定位置がガトウンに變更されるやうになつてから、ガトウン人工湖の渚水面地形測量に移つて、バスオビスボからシヤグレス河の上流へ溯り分水嶺を越へてアグア、スシアからガトウン河を下つてガトウ

ン村に出てまたシヤグレス河の左の一大支流のトリニダツド河へ溯つて天幕生活を續けたのであつた。

とて氏はこの野外測量隊について全く想像以上に苦心したことを續々語られて。

かくの如くにして二年餘の天幕生活をして測量を終つた頃に計畫の運河が出来る様になつて僕はガトウンに戻つて、ガトウンの堰堤及び閘門等に關する精細なる測量、續いて除水吐、堰堤、閘門、工事の施行に必要な線及び勾配即ち種々の遣方の Stake out に従事したのである。

とて氏は夫れから運河工事に従事する職員の話しや、氣温の話しに移つて。

我が技術界の誇り

この地方の氣温は乾燥季即ち十二月から翌年四月の初め迄は夜明け方は華氏の六十度位まで下降することがあるが日中は大概八十度以上でガトウン閘門築造中等は深サ八十尺もある閘室の中で混凝土の上では百十度以上の暑

さに達し時には日光の反射で目が眩むやうなこともある。又湿度はクレブラの分水嶺の太平洋側は大西洋側に比すれば雨量も少ないが私の居つたガトウンでは一ケ年の雨量は三千六百程位に達したこともある。

このことであつた、更に氏は言葉をついで。

私は其後事務所に入つて千九百十一年十一月十一日に巴奈馬運河地帯を去るまで設計製圖の内業に従事して居たが、私が設計してあとに残して來た内でガトウン開門の湖水の方の翼壁及び下流の中央繫船壁及び小規模ではあるが、ガトウン村の給水工事中の鐵筋混凝土造の *Agua Clarification Plant* は私が歸る時は百分の七八十出來て居たが、其後出來上りの寫眞を見ると取入口沈澱池や淨水池、唧筒小屋及び試験所等は凡て設計通りに出來て居るのを見ますと聊か働きがいのあつたやうな感じをするのである。

と、このやうに氏は巴奈馬運河工事に携はれたことに付いて筆者の問ひに對して語られたのであるが、パナマ地峽に

於て世界の一大工事に我國のエンジニアが只だ一人七年有半の永きに互つて故郷を離るゝこと千哩の椰子の生へて居る彼の地に於て、勇猛邁進或る時は風土病と闘ひ、或る時は山猫や大蛇と戰つて決死の覚悟でこの世界的大工事に従事したことは敢へて青山氏獨りの誇りのみならず廣き意味に於て全く我國技術界全體の誇りである。

巴奈馬海峽橫斷最初の道路

茲で一吋巴奈馬運河の歴史と云ふやうなものを見ると、彼の世界の航海家コロンバスは當時地球は球體であること信じて東方に大なる富源の地ありとて西歷千四百九十二年から四回も大西洋を西に航してその都度々に幾多の島嶼を發見したがその目的とする現今の支那への到着は失敗に終つたのであつた、更に西歷千五百二年に彼れの即ち最後の航海の時に北はホンヂュラスから南はドリエン灣に至るまでを探見して何處かに隠れたる海峽を見出して支那への航路を發見しやうと努めたがまだその目的を達成せずして彼れは遂に不歸の客となつたのである、其後約十八年

を経たる千五百二十年十一月に至つてマゼランが南米の一端に一つの海峡を發見したのである、この頃西班牙の浪人 Vasco Nunez de Balboa がパナマ海峡邊を探見して歩いて居る内に土人の話に……二つの海の間狭き所……があると云ふことを傳へ聞いて遂に千五百十三年に遠征隊を率いて大なる困難と戦ひ、多大の犠牲を拂つて北米から南米に通ずる分水嶺を越へて他の大洋岸に出たがこれを南海と名付けたのである、即ちこれが太平洋である。夫れから西班牙の人々が諸所を探見して、同國の植民地が南米中米に増加して千八百二十三年に夫れ等が獨立するまでは依然としてスペインの勢力下に支配されて居つたが、この間にペルウ等から西班牙本國に金銀其他の財寶を送るために千五百十九年始めて海峡横斷通路が巴奈馬からノレブレデデオスに至る九十哩間を開かれたのであつた、これが即ち巴奈馬地峽を横斷した最初の道路である。併乍ら折角出來上つたこの道路も雨天のために忽ち破壊されて到底不便であつたので、チアレス五世の時である千五百二十九年にこの地

峽を横切る最初の運河の目論見を立てたのは彼のサブアラであつた。これがパナマ運河計畫の嚆矢であらう。

スエズ運河の成功者レセップ氏の悲惨

而してチアレス五世次のフィリップ二世も初めはこの運河開鑿に賛成であつたか、その工事の至難なるを知つて且政略上の關係から遂にこの企てを禁ずるに至つたのである、其後幾多の紆餘曲折を経たが、千八百七十九年から千九百二年に至る間は佛蘭西が運河開鑿の事業經營を掌握したる時代であつたが、千八百六十九年スエズ運河を竣成せしめた、彼のレセップスは大なる譽望を擔つて三百餘年來の懸案たる兩米大陸を横斷して大西太平洋を接續する大運河開鑿の一大抱負を抱いて千八百七十一年に Antwerp に於て又千八百七十五年には巴里に於て Scientific Congress を開いて、遂に千八百七十九年五月に百三十五人の委員内技術者は四十二名を集めてその決議によつて十二年間の繼續事業として二億千四百萬弗を投じて Sea Level Canal を巴奈馬地峽を通じて開鑿することに決したのであ

る、而してレセツプは七十五歳の老軀を提げてこの大事業に盡瘁したが事業に大破綻を來たして遂に千八百八十九年丁度我國の明治二十二年にその會社は破産の悲運に陥りレセツプとその子息は訴へられん入牢の宣告を受けたがレセツプは老年の故を以て執行猶豫となり息子は上告の上無罪となつたのであつた。

竣工せる運河の概要

其後また幾多の波亂曲折を経て獨立戰爭後の千九百三年丁度我國の明治三十六年に當るが、パナマ州はコロムビア國から分離したので米國は直ちにその獨立を承認してその翌年マニユエル・アマドア・グレロが最初の巴奈馬共和國の大統領に就任したので、米國はこの新共和國と條約を結んでこれによつて運河の中心線から兩方へ五哩宛の廣さを有する地帯を譲り受けて警察權及ぶ衛生規則勵行及び運河建設權を得て夫れに向つて一千萬弗の一時金と工事開始から九年後より年々二十五萬弗をパナマ政府に與へることを約して一方佛國の新佛國運河會社から四千萬弗を以て

既成工事財産其他一切の特權を買受けて千九百四年の五月にその引繼を了へて愈々運河開鑿の端緒を開いたのである、これが即ち巴奈馬運河の略史である。而して竣工せる運河の概要は、船舶が太平洋方面から巴奈馬運河に入るに潮の最大干満二十一呎あるパナマ灣中のナオス島からバルホア、……パナマ運河の太平洋側入口に連續してゐるクルブラの切割から掘鑿搬出したる土石に依て造られた防波堤を右舷に見て底巾五百呎深さ平均潮位以下四十五呎の航路を通ふてバルボア棧橋を右に見つゝ八哩半程奥に入つて Miraflores の閘門に來てこの所で二段合計五十四呎三分の二昇つて小湖水に入り約一哩半行つて Pedro Miguel の閘門に到着するのである、そうしてまた三十呎三分の一昇つて愈々底巾三百呎長約九哩のクルブラ切割に入るのである、この所は時々外電が傳へるやうに地中では有名な所である。運河開通後でも十五立方碼のデツプアを有する淺瀬船一艘及び十立方碼のデツプアを有する淺瀬船一艘とにて常に幅及ぶ深さの維持に務めて居る位である。この切割を出ると

即ちガトウン人工湖へ入るのである、この湖中には底巾五百呎の航路約四哩底巾八百呎の航路約五哩底巾千呎の航路約十五哩、合計二十四哩、其深さは四十五呎から八十七呎の航路が掘つてあつてところ／＼に航路標識が設けてある。

而して湖水では夜でも安全に航行してガトウン閘門に行けるのであるが、此所に於て三段に八十五呎を降つて底巾五百呎深さ四十一呎長約七哩の運河を通り抜けてクリストオバル及びコロンの兩市を右舷に見て潮の最大干満の差約二呎二分の一ある大西洋のレモン灣に出るのであるが、これが大體太平大西兩大洋を結ぶ世界的大工事である巴奈馬運河の工事概要である。

鈴木技監の見る青山氏

青山氏が七年有半の永きに互つて熱帯の不健地で有ゆる辛苦を賞めつゝ、この巴奈馬運河の大工事に直接關係して我が技術員の優秀なるを彼等に見せしめたのであつたから筆はつい巴奈馬の運河に向つて走つたが、偕て、氏の人格について筆者は第三者に聞いて見ることも亦一趣味である

と思ふて現内務技監である鈴木雅次氏を技監室に訪ふて見たのである。

青山氏は正義感の強い實に正しい人である従つて氏には表裏といふやうなものはない、夫れ故にあまり正し過ぎるから一部の人は多少けむたがつたこともないではないが、これはけむたがる人がよく青山氏の人格を理解せんからである、氏の人格は要するに一言にして云へば崇高にして清廉潔白誠に得難き人格者であることは何人も異論はないと思ふてゐる、氏はかゝる立派なる人格を備へるに至つたのは畢竟内村鑑三、廣井勇の兩先輩の感化を若き時代に受けたものによる結果であらう、従つて氏は信仰も強く役人でもあれだけの人は少ないと必密かに思ふてゐる。

とて氏の人格の崇高なるを極力稱讚して。

氏は大學を出て間もなく海外に行かれてあの世界的大工事のパナマ運河の事業に或るは直接現場に於てまたは其他に於て約八ヶ年の永き間粒々辛苦されたが歸朝後は内

務省に入られて東京土木出張所の技師をして居られた、僕は學校に入つてから丁度八ヶ年の先輩に當る譯けである。役所に入つてからは學理と現場に明かるといふ第一人者として通ふてゐた。

とて鈴木氏は青山氏が地盤の悪い赤羽の岩淵水門等を心血を注いでなしたことや、荒川放水路工事を擔當して技術者として相當功績を残したことを縷々語られたあとに。

夫れから鬼怒川の改修工事にも携はれたが間もなく新潟の土木出張所長となつて立派に所長としてこれ亦相當の功績を擧げられてゐるが、こゝから技監となられたのである。

とて大河内分水工事破壊の後始末對策の苦心を述べて。

要するに青山前技監は前述したやうに技術にも卓越して居るのみならずその人格には部下であつた人々は勿論氏を知つてゐる人々は皆な心服してゐる云々。

と、これが鈴木現技監の偽らざる青山氏觀であつた。

H氏の青山觀

更にH氏に青山觀を聞いてみると、

青山氏は内村鑑三先生に私淑して居てその感化を多大に受け入れて立派な人格の持主である。

とて、これ亦人格の崇高なる人であることを極力稱讃して元來内村鑑三と云ふ人は廣井勇先生と共に確か札幌農學校の第二回目の卒業生であつて人格高潔の學者肌の人である、そして無教會主義で教會といふものは人の作つたもので神の教會とはちがつてゐる、キリストの眞の精進は何も教會の如き人の作つたものを通さなくても聖書に依つて研究も出来るし又導きも出来るのである。故に内村氏は聖書を克く説いて克く教つてゐる、内村氏が函館に居つた時でも早朝に起きて自分で家具身廻り一切を人手を煩はさずして片付けて實に聖者のやうな生活をなして人々の人格向上に努力してゐた、青山氏はかやうな人の感化を受けたから氏の人格も亦崇高であることは云ふまでもない。

と語つてくれたが筆者は青山氏との會見は前記したやうに

この稿を書くまでは唯だの一回ではあるが鈴木技監と云ひ
また日氏と云ひ實に克く青山氏を觀破してゐると思ふので
ある、氏の技術に對する卓見は倍て置いて、克く凡庸の官
吏に見るが如くにあらずして誠に平民的にして丁寧親切に
人に接ししかもその思想は常に技術界を通じて國家社會の
興隆を考慮し以て人生の福祉に貢獻するところあらんこと
を思ふてゐるやうである、斯くの如き人が我が技術界に健
在されてゐることは取も直さず斯界の誇りであると共に爲
邦家誠に意を強くする次第である。

x
x
x
x
x
x

若葉吟社詠草

根を洗ふ出水ボプラの揺れて居り	静
花もたぬ紫陽花ゆれて蔭り庭	同
濡れ色や大箱庭に朝日影	同
連れる峯近々と梅雨晴るゝ	同
梅雨晴れの納屋を圍みぬ草の丈け	落
出水して深かくとありぬ垂れ柳	同
頬杖の女まじろかず灯取むし	同
紫陽花やせゝらぐ中に寮暮るゝ	淺
瀧靜か黄昏茶屋に涼み客	同
出水して郵便遅し山の宿	同
今ぬけし蛇の衣に日さしかな	静
瀧深し吹き上ぐる風身に寒く	同
竹の皮散る小嵐や月の色	翠
瀧の音を夢心地なり山の宿	同
枳殻垣に揺れて果敢なし蛇の衣	野狐
	禪